

中学時代における友人グループの特徴とグループ間の関係が及ぼす学校適応感への影響

○中村幸音

(広島国際大学大学院心理科学研究科)

問題

友人グループの特徴には、人気度・中心度、排他性、凝集性、閉鎖性がある。これらは、学校適応感に影響し、様々な問題に影響すると考えられる。特に中学では、不登校の割合も高いため、グループの特徴と学校適応感の関係を調べることで、スクールカーストや不登校等の問題の解決に繋げることができるのではと考える。また、中学と大学を比較する意義は、グループの特徴や適応感への影響などが、中学、大学という年代特有の特徴、あるいは、それぞれ特有の環境によるものであるのかを比較することで明らかに出来ると考える。

そこで本研究は、中学時代と大学での友人グループ間の特徴(人気度・中心度)と友人グループの中の個人の特徴(人気度・中心度・排他性・凝集性・閉鎖性)と関係による適応感の違いを明らかにする、②大学時代と中学時代と比較することの2つを目的とする。

方法

調査対象者は、広島国際大学学生(1年生)。回答の欠損とグループ無所属を除外した116名(男性70名、女性46名)。調査対象年代は、中学2年と大学である。基礎項目として、グループの構成やクラス数、クラス替えの有無等の質問を行った。使用尺度は、水野・日高(2019)を参考に作成した。グループの人気度・(「私の所属するグループはみんなから親しまれている」)。仲間集団の特徴尺度(石田・小島, 2009), 仲間指向性尺度(三島, 2013), 青年用適応感尺度(大久保, 2005)。

結果

Table 1 グループの特徴の重回帰分析

予測変数	「居心地の良さの感覚」			「課題・目的の存在」		
	推定値	標準誤差	標準化推定値	推定値	標準誤差	標準化推定値
中学生						
人気度	0.30	0.07	0.34 ***	1.27	0.31	0.37 ***
中心度	0.27	0.06	0.38 ***	0.53	0.25	0.37 *
調整済R ²	0.35	***		0.21	***	
大学生						
人気度	2.43	0.47	0.48 ***	1.19	0.32	0.38 ***
中心度	0.35	0.41	0.08	-0.27	0.27	-0.10
調整済R ²	0.26	***		0.10	***	

*p < .05 **p < .01 ***p < .001

Table 2 グループの中の個人の特徴の重回帰分析

予測変数	「居心地の良さの感覚」			「課題・目的の存在」		
	推定値	標準誤差	標準化推定値	推定値	標準誤差	標準化推定値
中学生						
人気度	0.63	0.45	0.11	0.69	0.36	0.18
中心度	1.02	0.33	0.23 **	0.13	0.26	0.04
閉鎖性	-0.10	0.08	-0.09	-0.02	0.07	-0.04
凝集性	0.81	0.19	0.45 ***	0.24	0.15	0.21
排他性						
「独占的」	-0.10	0.06	-0.12	-0.02	0.05	-0.04
排他性						
「固定的」	0.06	0.08	0.06	0.12	0.06	0.20
調整済R ²	0.51	***		0.22	***	
大学生						
人気度	0.47	0.46	0.09	-0.09	0.30	-0.03
中心度	0.52	0.35	0.12	0.03	0.23	0.01
閉鎖性	-0.16	0.10	-0.15	-0.02	0.06	-0.04
凝集性	0.61	0.16	0.40 ***	0.46	0.10	0.49 ***
排他性						
「独占的」	-0.07	0.08	-0.08	-0.08	0.05	-0.15
排他性						
「固定的」	0.09	0.09	0.10	0.03	0.06	0.05
調整済R ²	0.34	***		0.25	***	

*p < .05 **p < .01 ***p < .001

グループとグループの中の個人の特徴を独立変数、学校適応感を従属変数とし、重回帰分析を行った結果を Table1-2 に示す。

各特徴の相関分析の結果、人気度(間)($r = 0.31$, $p < .001$)中心度(間)($r = 0.43$, $p < .001$)人気度(内)($r = 0.40$, $p < .001$)中心度(内)($r = 0.51$, $p < .001$)閉鎖性($r = 0.29$, $p = .002$)凝集性($r = 0.24$, $p = .01$)排他性(独占的)($r = 0.65$, $p = < .001$)排他性(固定的)($r = 0.38$, $p < .001$)から、いずれも正の相関がみられた。

考察

水野・太田(2017)では、グループとグループの中を問わず、地位(中心度・人気度)が高い生徒は、教室中やグループの中で中心的な役割を担うことが予想されるため、学校適応感が高くなったと示しており、グループの特徴においては、本研究の結果もそれを支持するものであった。グループの中の特徴においては、凝集性以外ほとんど先行研究を指示するものではなかった。

中学と大学ではほとんど同じ結果となった。中学では、普段からクラスで動くことが多いため、決まったグループが出来やすいのではないかと考えられる。大学でも学部・学科がクラスの役割を担っており、大学でも決まったグループが形成されると考えられる。